

2 古来から続く井堰と 現在の新しい形態…愛知川流域

○愛知川流域の10井堰

◆鎌倉時代以降に成立した井堰

愛知川流域の村々は、古来より扇状地地形による水不足に悩まされてきました。鎌倉時代になると、以前よりも大規模な水利開発が行われるようになり、工夫と努力を重ね、おおむね江戸後期までには愛知川本流に10ヶ所の井堰をつくりあげてきました。

高井の用水慣行

蒲生郡の延暦寺領得珍保は、延暦寺の僧「得珍」によって開墾されたことに由来するといわれています。得珍保の田を潤す高井は、延暦寺の主導で開発されました。旧神崎郡池田村地先の、愛知川左岸側の井堰から取水していました。

池田を過ぎると、高井は段丘崖上へ水をもたらす最短ルートをとどり

ながら、中野村、玉緒、市辺の一部までを潤しました。

また、市辺、蛇溝、今堀の遠方三村は井外といい、通常のかんがい期は取水できませんが、冬期や愛知川の増水時のみ、高井から取水する権利を得て、その期間に出来る限り村内の池や用水路に貯水して、春以降に利用していました。

駒井の成立

駒井（こまゆ 狛井、こうらいゆ 高麗井）は別名「いかだ 筏川」と呼ばれ、その成立には諸説あります。

古代における蒲生郡市辺村の小脇の首長であった「狛の長者」が堀削し、上流の愛知川より筏を流したので、筏川の名が残っている、とする説や、鎌倉時代の武将・佐々木頼綱が自らの所領小脇庄に水田を開き、百済の人に命じて引水した、とする説、佐々木氏の家来「狛」という人

が筏川を設けたとする説など、様々な説があります。

(参考)

愛知川水利史編集委員会編（1992）『愛知川水利史』p.50-100、愛知川沿岸土地改良区

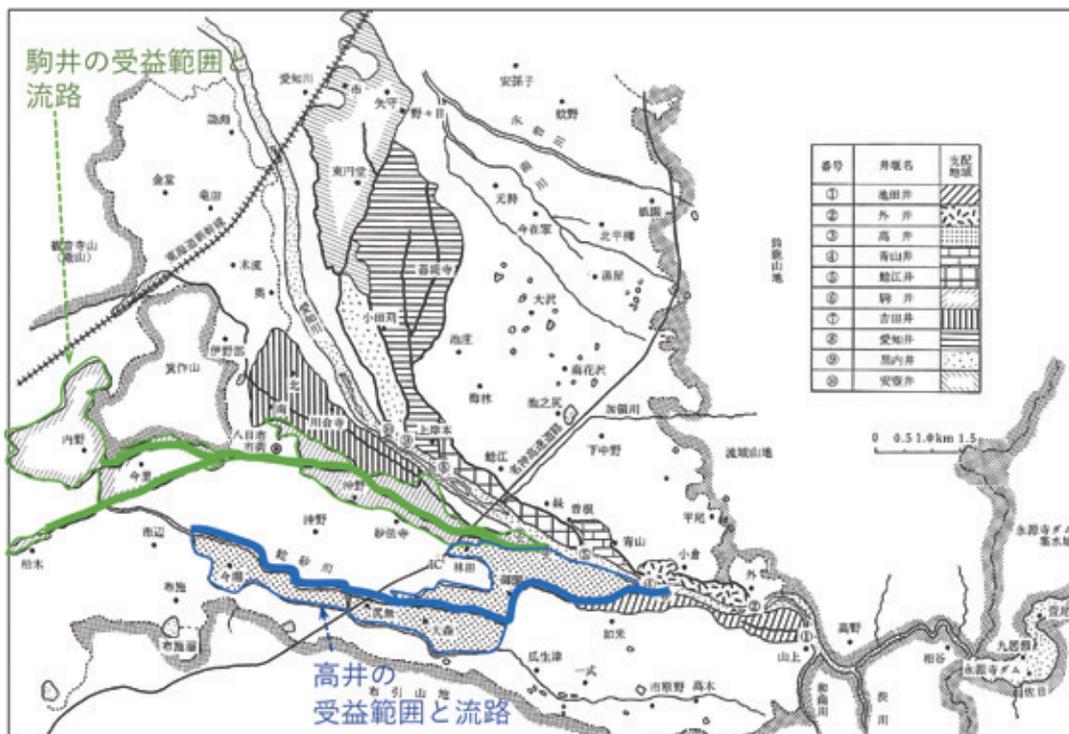
八日市市史編さん委員会編（1983）『八日市市史第2巻 中世』p.260-262、267-269、八日市市



▲高井 [『愛知川水利史』より転載]



▲駒井 [『愛知川水利史』より転載]



▲愛知川本流10ヶ井堰配置図 [『愛知川水利史』掲載の図を加工の上転載]

○愛知井から豊稔集水渠へ

◆現代の水利システムに生きる 愛知井の変遷

先に、「古来より開発が進んだ河川農業水利」で触れたように、愛知井は条里制時代以前に開削され、地域を潤していました。

愛知川右岸の^{なますえ}鯉江地先に、『堤防に沿って長さ13m、幅7.5m、深さ約4mの平面四角形に、断面台形の穴を掘り、各面を石積み(※1)』した^{うめどい}池樋(集水渠)であり、『底部には礫がひかれその中央に南北にのびる溝があるが、この溝が愛知川と暗渠で結ばれている(※1)』といわれています。

※引用1 『近江愛知川町の歴史 第2巻 近世・近現代編』 p.130

天明井の由来

18世紀半ばの江戸時代、愛知川の流路は右岸寄りでしたが、土砂の堆積によって徐々に左岸寄りになっていきました。

また、愛知井の池樋にも土砂が堆積し、何度か対策工事を行ったものの、愛知井はかんがい用水として機能しない状態が続いていました。

天明年間(1781~1789年)になると、愛知井のかんがい区域も含めて、全国的に干ばつと大飢饉が続きました。

この窮状から脱するため、代々彦根藩の川除奉行に仕え、愛知川中流域右岸の水利・治水を担当していた小田刈村(旧湖東町)の庄屋 菱澤孫右衛門は、地下を流れる愛知川の伏流水と、上流の鯉江の排水を取水で

きる大規模な水路の開削工事を彦根藩に請願しました。請願は受け入れられましたが、官営ではなく自普請での工事を余儀なくされました。

工事は天明5年(1785年)から始められ、菱澤孫右衛門は私財を投じて工事を進めました。途中、誤解に基づく工事の妨害や、大洪水など幾多の障害もありましたが、天明7年に工事は完成しました。この水路は「埋樋」という上下二重構造を持ち、上部は石組み、下部は丸太を組んだ暗渠構造で、下部に充満した愛知川の伏流水が上部に湧出するように設計されたものでした。

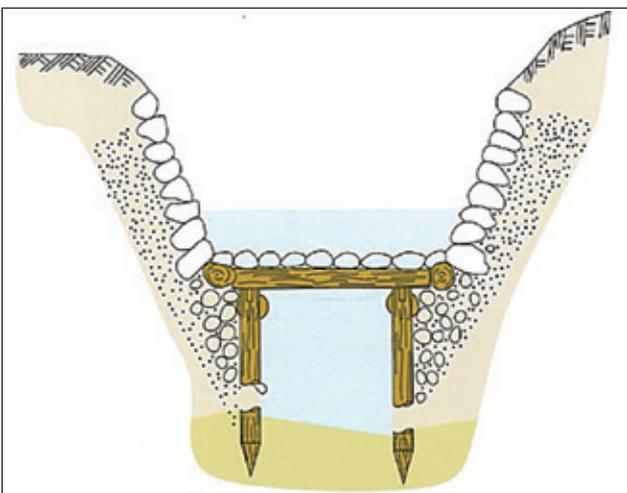
約1,000haの水田の貴重な水源となったこの用水を、人々は開削年代にちなみ、「天明井」と呼ぶようになりました。



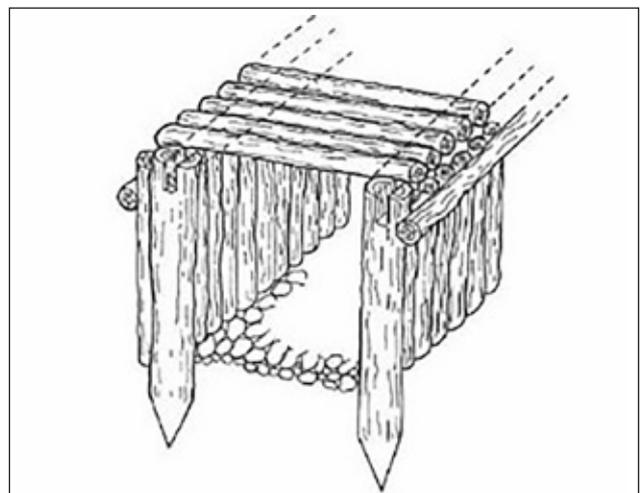
▲愛知井池樋(東近江市)【提供:滋賀県】



▲天明井(東近江市)【『愛東の歴史』より転載】



▲旧天明井 断面図
【『愛知川沿岸土地改良区 50周年記念写真集』より転載】



▲天明井用水路集水渠の構造 立体図
【『愛知川水利史』より転載】

現代の農業水利事業と愛知井

昭和時代の戦後になると、国営愛知川土地改良事業（昭和27～58年度）によって、永源寺ダムや各幹線水路、愛知川頭首工などが計画されました。

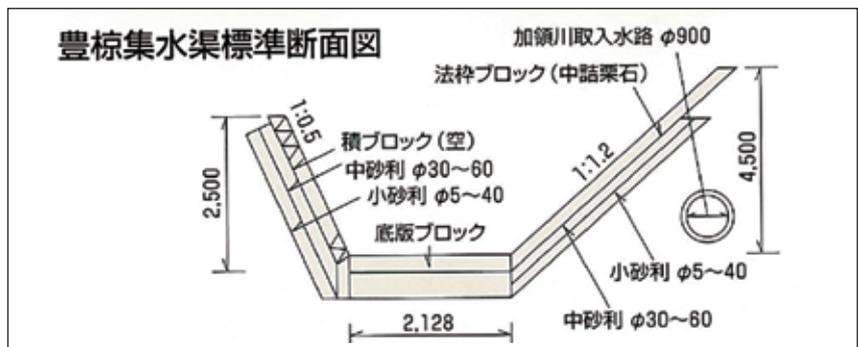
当初は、愛知井も他の施設に統合されて廃止されるはずでしたが、ダムからの送配水が安定せず、水田の必要水量が増えたこともあり、依然として用水不足が懸念されていました。そのため、他の多くの既存取水施設とともに、愛知井が事業計画に取り入れられることとなり、形を変えて存続することになりました。

まず、愛知川本川沿いの愛知井の位置に、長さ812m、深さ約4.5mの集水渠（豊椋集水渠）が設置され、愛知川の伏流水を集めます。その水は、必要に応じて揚水機を利用して、天明井を改修した愛知西幹線へと導かれます。

こうして、愛知井は近代技術のもとで生まれ変わり、現在も地域の用水安定化に貢献し続けています。



▲幹線水路配置図
 [『愛知川水利史』掲載の図を加工した『秦荘の歴史』掲載図を転載]



▲豊椋集水渠標準断面図 [『愛知川沿岸土地改良区 50 周年記念写真集』より転載]



▲豊椋集水渠（東近江市） [『愛知川沿岸土地改良区 50 周年記念写真集』より転載]

(参考)

愛知川水利史編集委員会編（1992）『愛知川水利史』p.74-76, 78-82, 115, 198-199, 愛知川沿岸土地改良区
 琵琶湖流域研究会編（2003）『琵琶湖流域を読む 上—多様な河川世界へのガイドブック—』p.235-237, サンライズ出版
 愛知川町史編集委員会（2010）『近江愛知川町の歴史 第2巻 近世・近現代編』p.126-131, 愛荘町
 東近江市史愛東の歴史編集委員会編（2010）『東近江市史愛東の歴史 第3巻 本文編 近代 現代 民俗 地理』p.480-484, 東近江市
 愛知川沿岸土地改良区編（2002）『愛知川沿岸土地改良区 50 周年記念写真集』p.112-113, 愛知川沿岸土地改良区

○永源寺ダム

◆永源寺ダム建設に至る背景

愛知川の自然条件

鈴鹿山脈に源を発する愛知川は、現東近江市を中心とする水田約7,000haを潤す水源となっており、この地域は、上流部から中流部にかけて扇状地が広がり、夏の渇水時にはほとんどが伏流してしまいます。そのため、ため池や井戸からの揚水に頼ることとなり、下流部では、上流の余水利用による不安定な水源から水を補給していました。

大正も末期になると、地下水の乱開発による用水不足への不安が高まり、ダム築造による水源強化が何度も計画されましたが、水利権の調整が難航し、戦前には建設に着手されませんでした。

食糧増産の時代

戦後の食糧難の時代が到来すると、食糧増産と土地改良への要求が強まりました。昭和22年の犬上・愛知・蒲生三郡の町村長の会合で、用水問題の抜本対策として愛知川本流に大規模なダムの建設が必要と結論付けられ、以降、周辺市町が国営事業によるダム建設を求める運動を推進することとなりました。

◆集落の水没～完成

水没集落住民の抵抗

永源寺ダムは建設への第一歩を踏

み出しましたが、ダムの水没地が明らかとなり、反対する住民との交渉は難航し、紛糾の様相を呈しました。開拓地への移住あっせんや資金融通などの措置を講じましたが、解決することはなく、昭和27年に愛知川沿岸土地改良区が設立され、交渉が引き継がれました。

ダム計画の変更

住民の抵抗が続く中、建設に向けた動きは進められましたが、地質調査によって、当初予定していた佐目地先でのダム築造は技術的に不可能であることが判明しました。そこで、ダムサイトを現在の位置（相谷地先）に変更し、昭和31年に国営愛知川農業水利事業計画として確定することとなりました。

住民の移転容認とダムの完成

住民に対する戸別訪問など、粘り

強い交渉が続き、昭和31年になると一部の住民が開拓地への入植希望を示すようになりました。

昭和34年に起工式が強行されたものの、依然として50戸あまりの反対住民は立ち退きを拒否していました。工事は一旦中止されたものの、建設促進を求める受益者側からの陳情の声も多く、昭和37年に反対住民が態度を軟化させ、ダム建設は転換点を迎えました。

その後も、交渉と工事は平行して続けられ、昭和46年に工事が終了、貯水の了解が得られたのは昭和47年、着工から20年後のこととなりました。

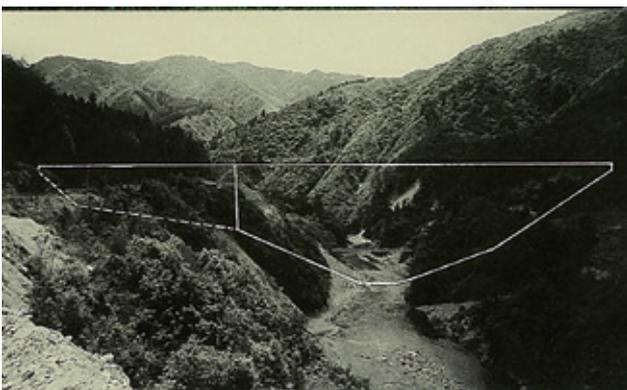
農業水利整備の方向性が、食糧増産から農業の効率化へとシフトする時期にあり、新たな方向性を模索しながら、補償問題も同時に解決しなければならない難事業でした。



▲反対者に取り囲まれる起工式参列者

〔所蔵：栗東市歴史民俗博物館、

出典：『愛知川沿岸土地改良区 50 周年記念写真集』〕



▲(左) 永源寺ダム着工前 (右) 完成後 〔『愛知川沿岸土地改良区 50 周年記念写真集』より転載〕

◆ダム建設による効果と課題

農業水利の向上

永源寺ダムは、農地の灌漑用水を目的とした農業用ダムであるため、営農への非常に大きな効果を発揮しました。用水が公平に確保され、同時に実施されたほ場整備によって農業の機械化可能となり、農家は重労働と水争いから解放され、兼業化した農家の休日作業が可能となり、地域の農業の発展に大きく貢献しました。

集落移転、自然環境への影響

農業水利が向上した一方、4集落175世帯の水没世帯を含む、213世帯の移転への協力を忘れてはなりません。また、自然環境に及ぼした影響も大きく、貯水による水の汚濁、河川の魚種の減少等が生じました。

新愛知川土地改良事業の取消と、国営「湖東平野地区」

昭和60年代になると、受益地域ではほ場整備、用排分離が進んだ結果、必要水量が増え、再び農業用水の不足が問題となりました。そのため、平成6年に永源寺ダムの上流に第二ダムを建設する新愛知川土地改良事業が計画されましたが、事前の調査が不十分で、工事が膨らむことが明らかとなり、計画は取り消されました。

その後、農業用水の安定供給と施設維持管理負担の軽減を図るために、永源寺ダム内の掘削や、老朽化した用水路などの更新、調整池の設置等を行う、国営かんがい排水事業「湖東平野地区」が平成26年に開始されました。

水利以外のダム利用

周りを山々に囲まれたダム湖の周

辺は、春にはサクラやツツジ、秋には一面のモミジが彩り、夏は魚釣りやキャンプでにぎわい、冬は雪に覆われ静寂が訪れる、四季折々の変化を楽しむことができる観光スポットになっています。

建設が提唱された約90年前から紆余曲折を経ながら、今なお永源寺ダムは地域において重要な役割を担い続けています。

(参考)

農林水産省近畿農政局淀川水系農業水利調査事務所編(1983)『淀川農業水利史』p.278-280, 農業土木学会

農林水産省近畿農政局淀川水系農業水利調査事務所編(1983)『淀川農業水利史』p.197-200, 農業土木学会

愛知川水利史編集委員会編(1992)『愛知川水利史』p.131-198, 愛知川沿岸土地改良区

永源寺町史編さん委員会編(2006)『永源寺町史 通史編』p.1043-1064, 東近江市

愛知川沿岸土地改良区編(2002)『愛知川沿岸土地改良区 50周年記念写真集』p.26-29,82-141, 愛知川沿岸土地改良区



▲永源寺ダム空撮【提供：滋賀県】



▲紅葉鮮やかな秋の永源寺ダム【提供：滋賀県】



▲ダム湖クリーン作戦
【『愛知川沿岸土地改良区 50周年記念写真集』より転載】